カルナカゴーミン作
『量評釈第1章復注』和訳研究(1)

桂　　紹隆

ダルマキールティの最初の大著『量評釈』(Pramāṇavārttika) の第1章 (Svārthānumāna-pariccheda) は、フラウワルナーによると、本来独立した論書として構想されたものであるが、ダルマキールティがディグナーガの『集量論』(Pramāṇasamuccaya) の「評釈」(vārttika) を完成しようとした時に、その冒頭に付加されたものである。その著述目的は、確実な推理・論証 (anumāna) の根拠となる正しい証因 (hetu) とは何かを徹底的に追求する点にある。彼は、正しい証因として、「結果」(kārya)「本性」(svabhāva)「非認識」(anupalabdhi) の三者をあげ、それを詳細に解説する。その間、本性証因に関連して独自の「アポーハ論」を展開し、最後にヴェーダを信頼に足りる聖典 (āgama) とするミーマーンサー学派に対する批判に多くを費やしている。

本書の研究は、フラウワルナーによるアポーハ論部分の独訳 [1930/1932/1933/1935] を嚆矢とするが、マルヴァニア [1959] とニョーリ [1960] によって相付いでサンスクリット刊本が出版されると、まずムケルジー＝長崎 [1964] による冒頭部分の英訳研究が発表された。それは、ヴォーラ＝太田 [1979/1980/1982] に引継がれた。さらに、太田心海、矢板秀臣、大前太、若原雄昭の和訳研究によって、我々は本書の全体像をようやくつかむことができるようになった。この間、ツイリングがウイスコンシン大学に提出した学位論文 [1976] には、アポーハ論部分の英訳研究が含まれているが、未刊である。なお、本書に関する書誌学的情報は、塚本他編『梵語仏典の研究　Ⅲ　論書篇』(1990、平楽寺書店) の第4章「認識論・論理学」(中井本秀執筆) 419頁以下を参照されたい。

最近、本書冒頭部分の詳細な英訳研究が公刊された。

Richard P. Hayes and Brendan S. Gillon, "Introduction to Dharmakīrti's Theory of Inference as Presented in Pramāṇavārttika Svopajñavṛtti 1-10", Journal of Indian Philosophy, Vol. 19-1, 1991.

ムケルジー＝長崎以来の労作であるが、必ずしもその結果に満足しないシュタインケルナーは、本書のうち純粋に論理学を扱う部分の独訳を準備中であり、まもなく公刊されるはずである。また、アポーハ部分の新しい独訳もムッフによって準備中である。

さて、本書には、三種の復注が残されている。

① Śākyabuddhi (ca. 660-720), Pramāṇavārttika-ṭīkā

(Tib. Tohoku 4220, Otani 5718)

② Karṇakagomin (9-10C.), Pramāṇavārttika-ṭīkā

(Skt. ed. by R. Sāṇkṛtyāyana, Allahabad 1943)

③ Śaṇkaranandana (9-10C.), Pramāṇavārttika-ṭīkā

(Tib. Tohoku 4223, Otani 5721)

松田和信は、①の一部のサンスクリット写本をネパールで発見し、稲見正浩、谷貞志とともにローマ字転写を公刊している。

M. Inami, K. Matsuda and T. Tani, A Study of the Pramāṇavārttikaṭīkā by Śākyabuddhi from the National Archives Collection, Kathmandu, Part I Sanskrit Fragments Transcribed, The Toyo Bunko, Tokyo, 1992.

②は、夙にシュタインケルナーによって指摘されたように、①のテキストをほとんどそのまま利用している。従って、①と②は丁寧に比較しながら読む必要がある。

E. Steinkellner, "Philological Remarks on Śākyamati's Pramāṇavārttikaṭīkā," Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf, Wiesbaden, 1980.

③は、未完であるが、その著者がカシュミール・シヴァ派のアビナヴァグプタらによって敬意をもって言及される点が注目される。

以下、本稿は②の冒頭からの和訳を提示するものであるが、出来るかぎり①

との異同を訳註で言及する。また、必要に応じて③の内容についても触れるつもりである。なお、『量評釈』の冒頭の２詩頌については、マノーラタナンディンの注釈の和訳を含む次の翻訳研究を参照して、益するところ大であった。

稲見正浩、「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(1)」『広島大学文学部紀要』第51巻、1992年

最後に、木村誠司は、ヤマーリの言明に従って、『量評釈』の冒頭の２詩頌はダルマキールティの真作ではないと断ずるが、少し早計ではないかと思う。彼のディグナーガとダルマキールティの論理学の峻別には、筆者も全く同意するのであるが、後者の理解には、トム・ティレマンズや若原雄昭に既に指摘されているように、「実在に基づく推理」(vastubalapravṛttānumāna) と並んで「聖典に基づく推理」(āgamāśritānumāna) を考慮しなければならない。そもそもシャーキャブッディの注釈の理解が、そのままダルマキールティの帰敬偈の理解であったと考える必要はない。また、前者が当時の仏教徒の常識に従って、ダルマキールティの帰敬偈中の「ブッダ」を解釈したとしても何等咎められることはないはずである。

カルナカゴーミン作『量評釈第１章復注』和訳

0.1. (p.1.6) 一切の束縛の境界（gati）を滅し、正しき自在性に確立し、一切の所知に及ぶ最も無垢なる智の相続から生まれ、長い間衆生利益に心を傾けてきた主、シュリー・マンジュナータ（文珠師利）に敬礼した後、今日私は何か『(量) 評釈』に関することを詳しく語ろうと思う。[1)]

0.2. (p.1.10) この［論理学の］主題の［錯綜した］密林においてさえ、我々など［のような者］が［何かを］語ることができるということは、すべて［我々］注（ṭīkā）作者のもつ利点である。方象（Dignāga）の棍棒のような牙によって［密林の］障害がなくなる時、得られた道を若象たちは楽々と進むのである。

0.3.（p.1.12）誰にせよ［自分の］美点を自慢して、私を軽蔑する人は、何かを知っているに違いない。けれどもそのような人に向かって［私は本書を著すという］この努力をするのではない。いつか誰かが、本書によって目的を成就するであろう。実にこの世において様々な知性の持主である生あるものには限りがないから。[2)]

1.0.（p.1.14）実に、たとえ論書の始めに帰敬偈（namaskāraśloka）をおかなくても、身口意によって好ましい神格（iṣṭadevatā）に対する帰敬を行うことによって福徳（puṇya）を積むから、支障なく論書（śāstra）は完成するとしても、［ダルマキールティ］先生は、［本書を］解説する［注釈］者や［その］聴衆のために［仏の］称賛（stuti）を先立てる活動をする（つまり、帰敬偈をおく）ことによって、［一層］卓れた福徳を生じることができるから、他者の利益になること（pārārthya）と、良き人々の習慣（sadācāra）を遵守することとを考慮して、とりわけすぐれた神格（viśiṣṭadevatā）（すなわち、仏）に対する崇拝の偈（pūjāśloka）を［冒頭に］‘vidhūtakalpanā’ 云々とおいたのである。[3)]

Pramāṇavārttika Ⅰ.1 (Gnoli, p.1.2-3; Malvania, p.1.6-7)

vidhūtakalpanājālagambhīrodāramūrttaye /
namaḥ samantabhadrāya samantaspharaṇatviṣe //
rtog pa'i dra ba rnam bsal zhing //
zab cing rgya che'i sku mnga' ba //
kun tu bzang po'i 'od zer dag //
kun nas 'phro la (D bar) phyag 'tshal lo // (P404b4-5＝D261b1-2)

分別の網が振り払われ、甚深にして広大なる身体を有し、普く［教えの］光を放つサマンタバドラに帰命する。

1.1.（p.1.19）［偈中の］「サマンタバドラ」という語が、［その語の］慣用的用法（rūḍhi）に従って［特定の］菩薩（すなわち、普賢菩薩）の意味で用い

られていると理解されない場合、こ［の帰敬偈］は仏世尊に対する崇拝［を意味するの］である。[4)]

そして、それ（崇拝）には称賛（stotra）による［崇拝］と敬礼（praṇāma）による［崇拝］の二種がある。

［偈中の］「帰命する」（namaḥ）という語によって敬礼による［崇拝］が、残り［の語句］によって称賛による［崇拝］が［意図されている］。

称賛にも自利円満（svārthasampatti）による［称賛］、利他円満（parārthasampatti）による［称賛］、利他円満の手段（parārthasampattyupāya）による［称賛という区別に従って］三種ある。

1.1.1.(p.1.22)既に自利を円満した者は、利他に関しても能力があるから、[5)]まず、［偈の］前半部（すなわち、「分別の網が振り払われ、甚深にして広大なる身体を有し」）によって、自利円満が述べられたのである。

そして、自利円満は、［自性・受用・変化の］三身を特徴とするが、［そのことは帰敬偈前半に言及される］三つの特性によって、優れたものとして顕示されている。すなわち、障害の断滅（āvaraṇaprahāṇa）という特性、甚深性（gāmbhīrya）という特性、広大性（audārya）という特性である。

そこ（帰敬偈）において、[6)]「分別」（kalpanā）とは、我や我がもの（ātmātmīya）などの形相をもって生じたり、所取能取（grāhyagrāhaka）という形相をもって生じたりする三界に属する心・心作用である。

それ（分別）は「網」（jāla）である。束縛を本性とするからである。

それ（分別の網）が「振り払らわれ」（vidhūta）、打ち破られ、[7)]習気とともに再び生じることがないようにされた［三］身が、そのように［vidhūtakalpanājālaという複合語によって］表されたのである。以上によって、障害の断滅という特性が説明された。

一方、甚深性と広大性という二つの特性は、［偈中の］「甚深」（gambhīra）と「広大」（udāra）の二語によって言及されている。分別の網を振り払ったもの（＝三身）は、甚深である。声聞や独覚などの境界ではないから。［それは］

広大である。一切の所知と一切の衆生利益に遍満するから。

「身体」（mūrtti）とは、自性・受用・変化の三身である。［これら三身を具えた］世尊が、[8]「分別の網が振り払われ、甚深にして広大なる身体を有するもの」（vidhūtakalpanājālagambhīrodāramūrtti）である。

1.1.2.（p.2.10）「バドラ」（bhadra）とは、善（kalyāṇa）を意味し、昇天（abhyudaya）と至福（niḥśreyasa）とを特徴とする。ある方から、それ（善）を「普く」（samantāt）、残りなく、それ（善）を求める人々が、その可能性に応じて（yathābhavyam）獲得できるなら、そのようなお方が「サマンタバドラ」（samantabhadra）である。この［語］によって利他円満が述べられた。[9]

1.1.3.（p.2.12）　そして、その利他円満の成就手段が、「普く［教えの］光を放つ」（samantasphuraṇatviṣ, pl.）という表現によって、述べられている。

「光」（tviṣ）とは光線（raśmi）である。ところで、ここ（帰敬偈）では、あるがままに事物を捉えるという点で、まさに[10]［説法は光と］類似するから、昇天と至福を対象とする諸々の説法（dharmadeśanā）が[11]、光のようである［という意味から］[12]「光」と呼ばれたのである。

すべてを説くことにより、所化のために[13]「普き」（samanta）、残りない、利他の成就の手段を「放ち」（√sphar）、遍満させる（vy√āp）［説法］が、「普く放つもの」（samantasphuraṇin, f.pl.）である。そこ（帰敬偈）において、[14]そのような「光」（tviṣ）、すなわち説法を所有する人が、「普く［教えの］光を放つもの」（samantaspharaṇatviṣ）である。

1.1.4.（p.2.17）　そして、「帰命する」（namaḥ）という語と結合するから、［帰敬偈中の三語］すべてが第4格［語尾をとるの］である。[15]

1.2.（p.2.18）　一方、慣用的用法に依る場合には、この「サマンタバドラ」という語は、大乗における特定の菩薩（＝普賢菩薩）に慣用的に適用される。

従って、こ［の帰敬偈］は菩薩に対する崇拝［を意味すること］になる。しかし、［個々の］語の意味は、[16]上と同様で構わない。

但し、次の相違がある。［菩薩の身体から］「分別の網が振り払われた」(vidhūtakalpanājāla) とは、菩薩地における障害を既に断じているという意味で理解されるべし。［菩薩の］甚深性（gāmbhīrya）は、声聞、独覚、凡夫の境界ではないという意味で［理解されるべし］。一方、［菩薩の］広大性（audārya）は、菩薩の偉大性（māhātmya）という意味で［理解されるべし］。ところで、菩薩方にも、［彼らに］相応しい三身が存在する。[17]しかし、［その］究極を究めるが故に、［三身は］仏たちのものであると確立される。

2.0.(p.2.25)　実に、この『(量) 評釈』という論書には、すぐれた理解者たちが必ず存在する。それにもかかわらず、［ダルマキールティ先生は］聴衆に欠点（śrotṛdoṣa）が多いという理由で、［本書は実際は他人の］助け（upakāra）となるにもかかわらず、そうではないと言って、[18]［仏の］善説を繰返し研究してきたことによって心が習慣づけられていること（sūktābhyāsa-bhāvitacittatva）こそが、［本］論書を［書き］始める理由であると示めすために、また、［聴衆は］この大いなる利益をなくしてしまう原因となる欠点を捨てるべしという、このことも婉曲表現（vakrokti）[19]によって述べるために、'prāyaḥprākṛta-' 云々と第２偈を述べるのである。

Pramānavārttika I.2 (G 1.4-7＝M 1.8-11)

prāyaḥ prākṛtasaktir apratibalaprajño janaḥ kevalaṁ
nānarthy eva subhāṣitaiḥ parigato vidveṣṭy apīrṣyāmalaiḥ /
tenāyaṃ na paropakāra iti naś cintāpi cetaś ciraṁ
sūktābhyāsavivardhitavyasanam ity atra anubaddhaspṛham //

skye bo phal cher phal la chags shing shes rab rtsal med pas na legs bshad rnams // don du mi gnyer kho nar ma zad phrag dog dri ma dag gis sdang bar yang // yongs (P adds su) gyur des na bdag la 'di ni gzhan la phan pa

yin zhes bsam pa'ang med // sems ni yun ring legs bshad goms pas lhur len (P lan) bskyed phyir 'di la dga' ba skyes // (P404b5-6＝D261b2-3)
たいていの人々は、つまらないものに執着し、その知性は不十分である。[そして] 善説に対して全く関心を持たぬばかりか、嫉妬の汚れにつつまれて、[善説を説くものを] 憎しみさえする。従って、本書が他人の助けになるなどと、私は考えたこともなかったが、長い間善説を繰返し研究してきたことによって [私の] 心の中に熱意が増してきた。だから、本書 [作成] に対する意欲がわき起こったのである。[20)]

2.1.(p.3.6)　こ[の偈]で聴衆の四種の欠点が示されている。①知慧が劣ること(kuprajñatva)、②無知であること(ajñatva)、③関心がないこと(anarthitva)、[21)] ④公平でないこと（amādhyasthya）である。

2.1.1.(p.3.7)　'prāyaḥ' という語は、[基本形が prāya と] a 音で終わり、多数を表す語（bāhulyavacana）である。[22)] 'prāyo janaḥ'（「たいていの人々」）とは、多くの人々のことである。

2.1.2.(p.3.8)　「つまらないものに執着し」(prākṛtasakti) とは、「つまらないもの」(prākṛta)、すなわち、[仏教] 以外の諸論書、それに対する (tatra) 「執着」(sakti) を持つ人である。[文法的にはこのような複合語は認められないかもしれないが、人々の間で複合語にしても同じ意味を] 理解させるから (gamakatvāt)、[23)] [当該語は構成要素が]格を異にする所有複合語(vyadhikaraṇa-bahuvrīhi)とみなすことができる。(Loc.Bv.)

あるいは、「つまらない執着」(prākṛtā saktiḥ) をもつ人と [考えれば]、[prākṛtasakti という複合語の構成要素は] まさに格を同じくする。そして、つまらないものを対象とする執着だから、つまらないのである。

この [複合語] によって、知恵が劣ることという、聴衆の [第一の] 欠点が言及されている。

2.1.3.(p.3.11)　「不十分な」(apratibala)、つまり、論書の理解に関して能力のない「知性」(prajñā) をもつものが、「その知性は不十分であるもの」(apratibalaprajña) であり、「たいていの人々」(prāyo janaḥ) と結びつく。

この［複合語］によって、無知であること［という聴衆の第二の欠点］が言及されている。

2.1.4.(p.3.12)　［そのようなものは］「善説に対して全く関心をもたない」(subhāṣitair nānarthy eva)。逆に、善説を説くものを「憎しみさえする。嫉妬の汚れにつつまれて」(vidveṣṭy apīrṣyāmalaiḥ parigataḥ)。[24]全く関心がなく、かつ、憎しみを抱くという意味。

この［一連の語］によって、順次、関心がないことと公平でないこと［という聴衆の第三、第四の欠点］が言及されている。

この場合も、［両複合語は］「たいていの人々」(prāyo janaḥ) と結びつけられるべし。

2.1.5.(p.3.15)　一方、他の人々は、'prāyaḥ' という語には、［基本形が prāyas と］s 音で終わる不変化詞 (nipāta) もある。[25]そして、それは、「たいてい」(bāhulyena) という第３格の意味で、本来用いられると、説明する。

2.1.6.(p.3.16)　「嫉妬」(īrṣyā) とは、他人の成功に対する心の怒りである。[26]それが即ち「汚れ」(mala) である。心を汚すからである。個々の事例[27]の差異があるから、［īrṣyāmalaiḥ と］複数表現をとる。

2.1.7.(p.3.17)　「従って」(tena) 以上の理由から、今書こうとしている「本書」(ayam)、すなわち『(量) 評釈』という書物が「他人の助けになるなどと私（＝我々 asmākam）は考えたこともなかった」(paropakāra iti naś cintāpi na)。

'paropakāra'［という複合語］は、他の人々の (pareṣām) 助けとなるもの

（upakāra）［という意味の Gen.Tp.］。［upakāra とは、何かが］それによって助けられる（upakriyate anena）手段（karaṇa）という意味で GHaÑ［という kṛt 接尾辞が upa√kṛ の後に導入されて形成されている］。[28]

あるいは、他の人々を（parān）助ける（upakaroti）主体という意味で、'paṛopakāra'［は upapada-samāsa］である。「行為対象（karman）が［共起項目（upapada)］である場合、aṆ［という kṛt 接尾辞が動詞語根の後に導入される］」（＝P.3.2.1: karmaṇy aṇ）。

2.1.8.(p.3.20)　「それでは、どうして論書の作成に向かって活動するのか？」という問いに、「心の中に、長い間」（cetaś ciram）云々と答える。

「長い間」（ciram）、すなわち長期間（dīrghakālam）、「善説を繰返し研究してきたことによって」（sūktābhyāsena）「熱意」（vyasana）、すなわち執着（sakti）、専心の意（tatparatā）が「増してきた」（vivarddhita）、つまり、善説を繰返し研究してきたことによって増してきた熱意をもつ「心」（cetas）が、[29]そのような［sūktābhyāsavivardhitavyasana という複合語 Gen. Bv.で］表現されている。

「だから」（iti）以上の理由によって、「本書［作成］に対する」（atra）、『(量)評釈』作成に対する「意欲がわき起こった」（anubaddhaspṛha）、願望が生じたのである。

以上のように、ある人々（eke）は解説する。

2.2.(p.3.25)　しかし、［我々］他の人々（anye）は、[30]別様に［解説する］。「このダルマキールティ先生は、何故＜評釈＞(vārttika)[31]という仕方で『集量論』(Pramāṇasamuccaya）の注釈を著し、他ならぬ独立の[32]論書を［著わさ］ないのか？」という質問の［出た］機会に、［先生は］"prāyaḥ" 云々と言われた。

この［第２］偈の簡潔な意味は次の如し。すなわち、「思慮（cintā）と悲心（karuṇā）により、私（ダルマキールティ）には『集量論』の注釈[33]［作成］

に対する願望が心の中にに生まれた」。思慮と悲心とは、ディグナーガ先生の書かれた論書が余り［聴衆の］助けにならないから［生じ］、さらに、［先生の論書が］余り助けにならないのは、聴衆の罪[34]に由来する。

2.2.1.(p.3.29)　一方、［各］語句の意味を述べる。

'prāyaḥ' とは、「たいてい」(bāhulyena)［の意味］で、「人はつまらないものに執着する」(prākṛtasaktir janaḥ) と結びつく。

「つまらないもの」(prākṛta) と［いう語］は、世間において低級なもの［という意味で］言われる。即ち、欠陥のあるものに随伴するものである。[35]かくして、異教徒 (tīrthika) の論書や、［ディグナーガ］先生の体系的論書 (nītiśāstra) に対して他派によって加えられた非難 (dūṣaṇa) は 、誤った知識から生じているから、欠陥のあるものに随伴するものである。だから、[36]「つまらないもの」(prākṛta) である。それら（つまらないもの）に「執着」(sakti)、即ち愛着 (anurāga) をもつものが、そのように ['prākṛtasakti' という所有複合語で] 表現された。

2.2.2.(p.4.7)　「しかし、何故つまらないものに執着するのか？」という問に対して、「その知性は不十分である［から］」(apratibalaprajña) と答える。だから、彼は悪説でも善説と理解して、つまらないものに執着するのである。

さらに、まさに「その知性は不十分であるから」、［ディグナーガ］先生の善説を自ら正しく理解することができず、［それを］誤りあるものと理解して、[37]その先生の諸善説に対して「関心をもたない」(anarthin)。

さらに、［ディグナーガ］先生に対して憎しみを抱くということを、「単に」(kevalam) 云々という。先生の「善説に対して関心を持たぬばかりか，嫉妬の汚れにつつまれて、憎しみさえする」(na kevalam anarthī subhāṣitair vidveṣṭy apīrṣyāmalaiḥ parigataḥ)。ディグナーガ先生に対して［憎しむの］である。

2.2.3.(p.4.12)　「［ディグナーガ先生は］どのような方か？」［という問い

に対して]「善説を繰返し研究することに対する熱意が増してきた方」(sūktābhyāsavivarddhitavyasana) [と答える]。[この句は、第2偈ではd句にあって、c句によって] 隔てられているけれども，[b句の定動詞 'vidveṣṭi' と] 必ず関係が存在する。《XとYとの間に関係がある時，たとえ [Yが] 遠くに離れていてもXとの間にそれ（関係）がある》という論理による。

「善説」(sūkta) とは、すばらしい言葉 (śobhanam uktam) であり、世尊の説法である。[38] それを「繰返し研究すること」(abhyāsa)、それに対する「熱意」(vyasana)、すなわち、それに対する極度の執心が「増してきた」(vivarddhita)、ディグナーガ先生が、そのように ['sūktābhyāsavivardhitavyasana' という所有複合語で] 表現されている。

この [句] によって、ディグナーガ先生が功徳と知慧 [の二資糧] を積まれたことを [ダルマキールティ先生は] 述べておられる。というのも、功徳と知慧を積まれた方々のみが、「善説を繰返し研究することに対する熱意が増してきた方」であるからである。

2.2.4. (p.4.16)　「知性が不十分である」(apratibalaprajña) ものは、[ディグナーガ] 先生の善説に対して「関心を持たず」(anarthin)、「つまらないものに執着する」(prākṛtasakti)。「従って」(tena) この理由から、「これ」(ayam) すなわち、『集量論』は、「あまりよい助けではない」(na paropakāraḥ/mchog tu phan pa min pa'o)。

'upakāra' とは、助けること (upakaraṇa) である。[kṛt] 接尾辞 GHaÑ は、行為の意味で [動詞語根の後に] 導入される。(=P.3.3.18: bhāve ghañ.) [39]

'para'、すなわち、卓越した (utkṛṣṭa)「助け」(upakāra) が、これ (=『集量論』) からは得られ「ない」(na) から、「あまりよい助けではない」(na paropakāraḥ) のである。

しかし、若干の助けは必ず存在する。そして、それが「たいてい」(prāyaḥ) という語によって、[40] まさに暗示されているのである。

2.2.5.(p.4.20)　'iti' という語は、理由の意味である。

以上の理由から、「私」(naḥ)、すなわち我々（＝ダルマキールティ）は、[41]「この論書（＝『集量論』）は、重要（mahārtha）であるが、多くの人々にとっては助けとはならない。だから、どのようにして、これを非常に実りあるもの（sāphalya）とすることができようか？」という「思慮」(cintā) を持った。

さらに、「菩薩の如き［ディグナーガ］先生に対する憎しみは、たとえほんの僅かでも、非真実（anartha）の原因[42]となる。従って、私（＝ダルマキールティ）は先生の思想体系（nīti）を誤りなく説明することによって、先生に対する尊敬の念を生じさせたうえで、かの非真実の原因[42]から、人を[43]退転させよう」という、このような、［人々を］苦から離脱させたいという欲求という形の悲心（karuṇā）［を私が持つこと］も、［第２偈中の］'api' という語から［知られる］。

2.2.6.(p.4.24)「だから、本書［作成］に対する意欲がわき起こったのである」(ity atrānubaddhasprham) において、［偈中の］第二の 'iti' という語によって、思慮と悲心とが［本書作成の］原因であることが述べられている。

「だから」(iti) この両者、思慮と悲心とによって、「［私の］心の中には」(cetas)、「長い間」(ciram) すなわち、長期間（dīrghakālam)、「本書」(atra)、すなわち『集量論』の注釈である『量評釈』[44]作成に対する「意欲がわき起こった」(anubaddhasprha)、つまり、欲望が持続して起こったのである。[45]

【訳註】

1）シャーキャブッディ注（以下ＳＢ）には、この帰敬偈以下の３偈のかわりに、次のような帰敬偈がおかれている。　Peking 1b3-2a3＝Derge 1b1-3: gang zhig shes rab mtshon rnos nyon mongs dra ba mtha' dag rab bral (D: dral) ba rtse ba'i bdag nyid can // shin tu dri med blo gros gang gi thugs ni shes bya kun la thogs pa mi mnga' zhing // gang zhig bskal pa grangs las 'das par gzhan la phan pa mdzad la skyo bar ma gyur pa // 'jam dbyangs de la phyag 'tshal nas ni gzhung 'grel lugs brgya ldan pa rnam par dbye bar bya /「知慧の鋭い剣によって煩悩の網がすべて取り除か

れ（／切り裂かれ）、遊戯神通を本性とし、全く無垢なる智の故に、その御心がすべての所知において無礙であり、数を超越した劫の間他人のために利益をはかって倦むことがない、マンジュゴーシャ（文殊師利）に敬礼した後、百もの解釈がある（この）書物『(量）評釈』を分析しよう。」

カルナカゴーミン（以下、ＫＧ）の帰敬偈の韻律は、Śārdūlavikrīḍita、次の２偈のそれは Vasantatilakā である。

2）avajñāyati は、文法的にも、韻律上も、奇妙である。avajānāti としても韻律には合致しない。

校訂者サーンクリティヤーヤナは、脚注で本詩頌はバヴァブーティの戯曲『マーラティーとマーダヴァ』の次の詩頌のパロディーであると言う。ye nāma kecid iha naḥ prathayanty avajñāṁ jānanti te kim api tān prati naiṣa yatnaḥ / utpasyate mama tu ko'pi samānadharmā kālo hy ayaṁ niravadhivipulā ca pṛthivī // I.6 // (Haridas Skt. Series 247, p.13)

辻直四郎『サンスクリット文学史』（岩波全書277）91頁に和訳されている。「われらを軽蔑なさる方々は、何かご承知には相違ない。とはいえわれらの骨折はそのような方々に向けられてはおりませぬ。われらと意向を同じくする人も、いつか生まれて参りましょう。時間は無限、大地は広いものでありますから。」

3）p.1.16: stutipurassarayā → stutipuraḥsarayā.

本節に対応するＳＢは、以下のようである。　P2a3-2b2＝D1b3-2a1:

ya rabs dag ni phal cher bstan bcos rtsom pa la 'dod pa'i lha la phyag byas so (D: byed do) // de bas na slob dpon 'di yang bdag nyid dam pa rnams dang spyod pa mthun par bstan par bya ba dang / khyad par du (P: om.) 'phags pa'i lha la bstod pas bsod nams 'phel la / bsod nams 'phel bas kyang bstan bcos bgegs med par tshar phyin pa dang / 'chad par byed pa dang / ṇyan par byed pa rnams sngar bstod nas zhugs pa las bsod nams skye ba'i phyir gzhan gyi don gzigs nas / rtogs pa'i dra ba rnams bsal cing (D: zhing) zhes bya ba la sogs pa khyad par du 'phags pa'i lha la mchod pa brtsams so //

「先賢たちは、概して、論書を始めるにあたって、好ましい神格に対する帰敬を行ってきた。だからこの［ダルマキールティ］先生も、①自らが良き人々と行いが同じであることを示さねばならないこと、②とりわけすぐれた神格に対する称賛によって［自らの］福徳を増大し、さらに［その］福徳の増大によって、論書が支障なく完成すること、そして、③［本書を］解説する［注釈］者や［その］聴衆のためにまず［仏の］称賛を先立てる活動をする（つまり、帰敬偈をおく）ことによって［他者に］福徳を生じるから、他者の利益になるとお考えになって、'vidhūtakalpanājāla-' 云々と、とりわけすぐれた神への崇拝［の偈］を始めたのである。」

Cf. Yaśomitra, Abhidharmakośavyākhyā, ed. Wogihara, p.2,15-17: namaskārārambhas tu svapuṇyaprasavārtham. sadācārānuvṛttipradarśanārtham vā. kṛtābhimatadevatāpūjāstutinamaskārā hi santaḥ kriyām ārabhanta iti satām ācārāt.

4）KG pp.1.19-3.14 ＝ SB P2b2-4a2＝D2a1-3b2.

5）p.1.22: bhavatīvi→bhavatīti, cf. SB P2b4: nus par 'gyur bas.

6）p.2.4: tatra; no equivalece in SB.

7）p.2.5: vidhvastam; no equivalence in SB.

8）p.2.10: omit the daṇḍa after bhagavataḥ.

9）SB P3a3＝D2b4 adds ma tshang ba med par (*avikalam).

10）p.2.14: -grahaṇa evam (Read eva); SB P3a4-5＝D2b5: rab tu gsal bar byed par (*prakāśane). kho na (eva) appears after -viṣayās.

11）p.2.14: omit the daṇḍa after dharmadeśanā.

12）Cf. SB P3a5＝D2b6: 'od zer dang 'dra bas na.

13）p.2.16: vinayebhyaḥ→vineyabhyaḥ; cf. SB P3a5-6＝D2b6: gdul bya rnams la.

15）ヤショーミトラは、「カーラカ」は話し手の意図によるとして、namaḥ が第二格語尾をとるのも認めている。Yaśomitra, Do., p.7.10: vivakṣātaḥ kārakāṇi bhavanti.

16）p.2.20: padārthas; cf. SB P3a8＝D3a1: tshig (pada).

17）p.2.23: kāyatrayam apy (Read tu?) anurūpaṁ bodhisattvānāṁ (Read in api?) vidyata eva; cf. SB P3b1-2＝3a2: byang chub sems dpa' rnams la *yang* rjes su mthun pa'i sku gsum *ni* yod pa kho na te, Manorathandin's Vṛtti (ed. Sāṅkṛtyāyana) p.2.14: kāyatrayan *tu* bodhisattvānām *apy* asti.

18）p.2.26: iva kṛtvā→iti kṛtvā; cf. SB P3b3＝D3a3: skad du byas nas.

19）Vakrokti は「修辞法」（alaṁkāra）の一種であるが、第2偈におけるその役割は、筆者には不明である。

20）韻律は Śārdūlavikrīḍita である。なお、b句のチベット語訳は、原文のparigata（Tib. yongs gyur）の構文を正確に理解していないように見える。チベット文から訳すと「……嫉妬の汚れの故に、憎しみさえする」となろう。ギャル・ツァップなどのチベット人学者も、この点には気づいていない様子である。『量評釈』のチベット語訳は、シャーキャ・パンディタの校訂も経ており、おおむね信頼のおけるものであるだけに、冒頭にこのような錯誤のあることは不思議である。この点に関しては、大谷大学の白館戒雲氏の御助言を得た。ここに記して、感謝の意を表したい。

21）SB P3b5 don du gnyer ba nyid: D3a5 don du *mi* gnyer ba nyid

22）p.3.7: prāyaḥ śabda okārānto → prāyaḥśabdo 'kārānto; no equivalence in SB.

23）複合語の形成原理としての 'gamakatva' については、次を参照されたい。

S.D.Joshi, Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya, Samarthāhnika (P.2.1.1), Poona, 1968, pp. vi-vii, 42 fn.62.

24) Cf. SB P4a1＝D3b1: phrag dog dri ma dag gis sdang bar yang yongs su gyur *cing ldan pa yin te.* 下線部に相当する語は、KGには見られない。'parigata' を「所有」(ldan pa) の意味の語と言い換えたのであろうが、注20)に述べたのと同じ構文上の問題がある。

25) KG p.3.15-16 has no correspondence in SB. 'prāyaḥ' を「たいてい」と副詞にとるのが、カルナカゴーミンの正説である。cf. 2.2.1.

p.3.15: prāyaśśabdasyā (?sa) kārānto → prāyaḥśabdasya sakārānto.

26) KG3.20-6.5＝SB P4a2-7a1＝D4b2-6a2.

27) SB P4a3: bsal ba'i → gsal ba'i (＝D4b3)

28) Cf. P.3.3.16, 3.3.19.

Cf. SB P4a4-5＝D3b3-4: gzhan dag gi (P gis) phan pa ste 'dis phan pa byed pas te byed pa yin no // yang na gzhan dag la phan par byed pas na gzhan la phan pa ste las yin no //「[偈中の「他人の助け」gshan la phan pa とは] 他の人々の助けという意味であり、それによって [何かを] 助けるものという意味で手段のことである。あるいは、他の人々を助ける主体という意味で、「他人の助け」であり、[この場合「他人」は] 行為対象である。」

29) p.3.22: cetasas; no equivalence in SB.

30) 以上の「ある人々」(eke) の解釈は、シャーキャブッディやカルナカゴーミンの認めるところではなく、この「他の人々」(anye) の解釈こそ彼らのより好むものと見なされねばならない。その意味で、Steinkellner [1980] p.287, fn.16 の記述は若干修正される必要がある。

Cf. Thieme, Pāṇini and the Pāṇinīyas, Kleine Schriften, T.2, p.587.

なお、彼の記すように、KG p.3.25-4.27=SB P4a7-5b2 (=D3b6-4b6) は、『量評釈』のマノーラタナンディン注の末尾に付せられたヴィブーティチャンドラの書き込み (以下 PVMV) の一部 (p.515.3-23) とほぼ一致する。以下のテキスト校訂にはこれも利用することとする。

31) Cf. Bronkhorst, "vārttika", WZKS Band XXXIV, 1990, p.123 ff.

32) p.3.26: svatantram; SB P4a8＝D3b6: rang dga' (*sveṣṭam?).

33) p.3.28: vyākhyāyāṁ ＝ SB D3b7: bshad par (missing in P).

34) p.3.29: śrātṛjanā- → śrotṛjanā- (＝PVMV p.515.6) ; cf. SB P4b2＝D4a1: nyan pa po'i skye bo.

35) p.4.5: duṣṭonvayaḥ → duṣṭānvayaḥ (＝ PVMV p.515.7); cf.SB P4b3＝D4a2: gang

zhig rgyu ngan pa las byung ba yin no.

36) p.4.6: omit the daṇḍa after -dūṣaṇāni; duṣṭānvayād yataḥ → duṣṭānvayāny ataḥ (= PVMV p.515.8); cf. SB P4b4＝D4a3: rgyu ngan pa las byung ba yin no.

37) p.4.9: doṣavattvena gṛhītvā; no equivalence in SB.

38) p.4.14: bhagavatpravacanam; no equivalence in SB.

39) Cf. SB P5a4＝D4b2: phan pa ni phan pa ste ngo bo (＝bhāva) yin no.

40) p.4.20: prāyaśabdena → prāyaḥśabdena.

41) p.4.20: asmākaṁ → no'smākaṁ; cf. PVMV p.515.17: nāsmākaṁ (sic!); however, no equivalnent of 'asmākam' in SB (bdag gis).

42) p.4.22: anarthahetur; cf. SB P5a7＝D4b4: phung bar 'gyur ba'i rgyu（災厄の原因）。artha/anartha は、『量評釈自注』の冒頭に現れる重要な概念であり、シャーキャブッディとカルナカゴーミンでは解釈に相違があるため、このような異読が生じたのであろう。

43) p.4.23: janaṁ; no equivalence in SB.

44) p.4.26: -pramāṇavārttika-; SB P5b2＝D4b6: gzhung 'grel.

45) かくして、第2偈は次の様に訳出することができよう。

「たいてい、人はその知性が不十分であるから、つまらないものに執着する。[そして、ディグナーガ先生の] 善説に対して全く関心を持たぬばかりか、嫉妬の汚れにつつまれて、善説を繰返し研究することに対する熱意が増してきた方（＝ディグナーガ先生）に対して憎しみさえする。従って、この [『集量論』] は [たいていの人にとって] あまりよい助けとはならない。だから、私は [どうしたらこの『集量論』を実りあるものにできるかという] 思慮も [人々を憎しみという非真実の原因から離脱させようという悲心も] もつようになった。だから、[私の] 心の中には、長い間、[『集量論』の注釈である] 本書 [『量評釈』作成] に対する意欲がわき起こったのである。」

Karṇakagomin's Ṭīkā on Pramāṇavārttika, Chapter I (1)

Shoryu KATSURA

This is the first attempt to put into a modern language Karṇakagomin's commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttika-svavṛtti. As is well known, his commentary closely follows Śākyabuddhi's commentary on the same text, so that we should compare the two texts carefully to understand and correct the texts. The following is the synopsis of the portion of the text translated in this paper:

0.1.-0.3. The Introductory verses
1.0. Introduction to the Maṇgala Verse, PV I.1.
1.1. Samantabhadra=Buddha
1.1.1. svāthasampatti=kāyataraya
1.1.2. parārthasampatti
1.1.3. parārthasampattyupāya=dharmadeśanā
1.1.4. 'namaḥ'
1.2. Samantabhadra=Bodhisattva
2.0. Introduction to the Introductory Verse, PV I.2.
2.1. Four Defects of the Listners
2.1.1. 'prāyaḥ'='most'
2.1.2. kuprajñatva
2.1.3. ajñatva
2.1.4. anarthitva & amādhyasthya
2.1.5. 'prāyaḥ'='mostly'
2.1.6. 'īrṣyā'
2.1.7. 'paropakāra'
2.1.8. The Reason for Writing PV
2.2. The Preferable Interpretation of the Verse
2.2.1. 'prāyaḥ'='mostly', 'prākṛtasakti'
2.2.2. The Reason for 'prākṛtasakti'
2.2.3. The Characterization of Dignāga

2.2.4.　‘paropakāra’

2.2.5.　‘cintā’ and ‘karuṇā’

2.2.6.　The True Reason for Writing PV